

・第1学年 社会学習指導案

日時 平成28年11月9日(水)

学級 1年2組(男14名 女14名 計28名)

場所 1年2組教室

授業者 西川 龍見

- 1 単元名 第3章 世界の諸地域 1節 アジア州—急速に進む成長と変化—
5. 南アジアで急速に成長するインド

2 単元について

(1) 教材観

本単元は学習指導要領の地理的分野の内容(1)世界の様々な地域の「ウ 世界の諸地域」にあたり、目標は「ウ 世界の諸地域 世界の諸地域について〈中略〉各州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる地理的事象を取り上げ、それをもとに主題を設けて、それぞれの州の地域的特色を理解させる」ことである。その際、生徒の生活実感と結びつく学習内容となるよう工夫するとともに、学習終了後に概略的な世界像が形成できるように学習内容を構成する必要がある。そして、この学習が、日本や釜石という郷土を相対化させ、郷土の理解を深めるとともに、国際的な視野という意味での「広い視野」の獲得につながるものとしたい。

(2) 生徒観

本学級におけるNRT(2016年4月実施)の結果をみると、社会的な思考・判断・表現(全国比86)、資料活用の技能(全国比94)、社会的事象についての知識・理解(全国比89)となっており、小学校内容の定着が十分とはいえない状況である。本学級の生徒の授業の取り組みを見ても、社会に対して苦手意識を持っている生徒が一定数おり、そのため、自信をもって発言する生徒に限られている、多様な回答を許容する問いであっても正答を回答しようとするなどの問題があった。そこで、確認テストを授業の最初に実施して知識の定着をはかるとともに、ペア・グループで考えを交流する機会をもち、グループでの交流を経た意見を肯定的に評価するなどの取り組みを行い、少しずつ多様な意見が出るようになってきている。

(3) 指導観

① 本単元の指導について

本単元の指導は、成長著しいアジア地域を「経済成長」という主題のもと、「アジアの地域で働くとしたらどの地域がいいか」という学習課題を設定し、経済・産業の発展という視点で学習を進めていく。グローバル化の進展にともない、世界が私たちにとって身近になって久しい。生徒たちが社会で働くころには世界はさらに身近な存在になっているであろう。特にアジア地域は急速な経済成長を遂げ、生徒達にとって生活や働く場となっている可能性が十分にある。そこで、働く場所としてアジア各地域を比較することは、「経済成長」の可

能性と「生活場所」という二面から生活実感をともなって学習できる機会となるとともに、自分なりに働く場所としての評価を行うことで、自分の意見と根拠を他者と交流する機会となるはずである。

② 研究とのかかわり

研究主題「自己肯定感を持ち、復興に貢献しようとする生徒の育成」

ーいのちを大切にし、郷土を理解する活動を通してー

教科として、生徒の自己肯定感を高めるためには、生徒が満足できる授業を提供することが重要である。満足できる授業は、生徒の学習意欲を高め、自尊感情を高めることにより、自己肯定感を高めることにつながると考えるからである。そのため、生徒にどんなときに授業に満足するかアンケートを実施したところ、下のような結果であった。

【質問】 あなたが「授業に満足したなあ」と思うときはどんなときですか。次の中から3つ選び満足する順番に1～3の数字を書いてください。

	先生の説明がわかりやすかったとき
	先生の話聞いて、疑問に思っていたことが、わかったとき
	友達や班で協力して活動したとき
	友達や班の人に教えてもらい、わかるようになったとき
	班や学級の仲間に自分の考えを自信を持って伝えることができたとき
	班や学級の仲間に教えたり、自分の考えを伝えたりして、感心してもらえたとき
	班や学級の仲間の考えを聞き、自分と違う考え方があることに気づいたとき
	自分の考えを文章にきちんとまとめることができたとき

【回答】

あ. もっとも満足するとき（「1」をつけた項目）

- 1 先生の話聞いて、疑問に思っていたことが、わかったとき（9名）
- 2 友達や班で協力して活動したとき（7名）
- 3 先生の説明がわかりやすかったとき（4名）

い. 満足するとき（「1」～「3」をつけた項目）

- 1 先生の話聞いて、疑問に思っていたことが、わかったとき（15名）
- 1 友達や班の人に教えてもらい、わかるようになったとき（15名）
- 3 友達や班で協力して活動したとき（13名）

上記の授業の満足度に関するアンケートから、疑問に対しての「わかった」を仲間と共有することが、自己肯定感につながると考える。そこで、本校における研究主題を達成するために、単元を通して授業の中に、自分の考えを持ちそれをグループで交流する時間を

なるべく多く確保するように努めた。仮説やまとめの場などで意見を交流させたり、課題の追求の段階で仲間と協力して作業をしたりする時間をとることで仲間との「わかった」を共有する機会を増やしたい。さらに、他人の意見を肯定的に受け入れる機会と自分の考えを評価される機会を多く持つこと、教師が肯定的に生徒の発言を評価することで、他者から自分の考えを承認してもらうことや、違う考え方にふれる喜びについても気づいてほしいと考える。

3 単元の目標と単元の評価規準

(1) 単元の目標

- ・アジア州に関して「経済の成長」と「人々の生活」というテーマを意欲的に追及し、アジア州の経済成長を学習することを通して、地域ごとの特色を理解する。
- ・アジア州に関する統計資料や主題図、写真の読み取りなどの地理的技能をはぐくむとともに、アジア州に関する基本的な知識を身につける。

(2) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
・アジアの諸地域を概観する中で、経済成長に関心を持ち、設定された学習テーマを意欲的に追及している。	・アジア州の経済が成長してきた理由について多面的・多角的に考察し地域ごとの過程や特色を理解している。	・アジア州の地域的特色について有用な情報を適切に選択して、それを読み取っている。	・アジア州について「経済成長」の学習テーマをもとに地域的特色を理解するとともに、アジア州に関する基本的な知識を身につけている。

4 単元の指導計画と評価規準（7時間計画）

学習内容		評価規準
1	アジア州をながめて	・アジア州の区分、自然環境、文化、人口などの基礎的事項を理解している。【知識・理解】 ・アジア州の経済成長に関心を持ち、意欲的に追求しようとしている。【関心・意欲・態度】
2	東アジア① アジア NIES	・アジア NIES の工業化の様子をグラフから読み取ることができる。【技能】 ・NIES が発展した背景と今後の成長可能性について思考し、文章で表現している。【思考・判断・表現】
3	東アジア② 中国	・中国の産業の特徴と急成長の理由について、基礎的事項を理解している。【知識・理解】 ・中国の産業の問題点について自分なりに考え、評価することができる【思考・判断・表現】

4	東南アジア	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフから東南アジアの経済の特徴や変化を読み取ることができる。【技能】 ・東南アジアの経済上の課題と人々の生活の関連に関心を持ち、意欲的に追求しようとしている。【関心・意欲・態度】
5	南アジア（本時）	<ul style="list-style-type: none"> ・インドの経済成長の理由について関心を持ち、意欲的に追求しようとしている。【関心・意欲・態度】 ・インドの経済面での強みについて把握し、自分なりの根拠をもって総合的な評価を行うことができる。【思考・判断・表現】
6	西アジア・中央アジア	<ul style="list-style-type: none"> ・西アジアや中央アジアの産業の特色をグラフなどから読み取ることができる。【技能】 ・西アジアや中央アジアの今後の成長可能性について、自分なりに判断することができる。【思考・判断・表現】
7	アジアの学習を振り返る	<ul style="list-style-type: none"> ・アジア州で、急速な成長が進んできた理由や課題点などを整理して、今後の経済発展の可能性が高い地域を自分なりに判断することができる。【思考・判断・表現】

5 本時の指導

(1) 本時の目標

- ・インドの経済成長の理由について関心を持ち、意欲的に追求しようとしている。
【関心・意欲・態度】
- ・インドの経済面での強みと弱みについてそれぞれ把握し、自分なりの根拠をもって総合的な評価を行うことができる。
【思考・判断・表現】

(2) 本時の評価規準

評価規準	具体の評価規準	
	B（概ね達成している）	C（努力を要する生徒への手立て）
インドの経済成長の理由について関心を持ち、意欲的に追求しようとしている。	アメリカの IT 企業がインドとつながりが強い理由を考え、自分なりの仮説を立てることができる。	インドの経済上の強みについて、グループで意見を出し合う。
インドの経済面での強みについて把握し、自分なりの根拠をもって総合的な評価を行うことができる。	インドの経済面での強みについて具体的な事象を挙げてまとめることができ、課題とあわせて根拠をもって評価を行うことができる。	インドの経済面での強みについて、他の人の発表を参考に賛成か反対かを問いかける。

(3) 本時の指導

2015年、インド人のサンダー・ピチャイ氏が google の CEO に就任した。マイクロソフト社な

どアメリカの巨大 IT 企業のトップにインド人が就任している背景には、アメリカの巨大 IT 企業とインドの強い結びつきがある。そこで、本時では、まず、アメリカの IT 企業がインドにソフト開発などのアウトソーシングを依頼する理由を考えることで、インドの産業の強みについて生徒に考えさせたい。次に、インド社会が抱える問題や経済発展上の課題点などを把握させ長所と短所を総合して、インドを「働く場所」として評価させ、グループ・クラスで発表することで意見の交流を図りたい。

(4) 研究主題との関わり

2 (3) ②で述べた「仮説」「インドの評価」「まとめ」の場面で自分の考えをもち、他者と考えを交流し、評価された意見を発表する場面を設定することで自己肯定感を感得させたいと考えている。また、確認テストなど「できた」「わかった」を感じることができる機会や、難しい問題に挑戦し、それを解く機会を設定することで自己肯定感を感ぜられるように配慮した。さらに、インドの IT 企業発展の一要因として、アメリカからインドに戻ってきた人材の存在があることを教えることで、郷土の復興に貢献するあり方を考えさせる材料としたい。

(5) 本時の展開

	学習内容	学習活動	指導上の留意事項	【評価】 ■資料
導入 10分	0 前時の復習	● <u>確認テスト</u>	◎満点の生徒に手を挙げさせる。	
	1 課題の設定	● <u>昨年、googleのCEOに就任したサンダー・ピチャイ氏はどこの国の人？</u> ● <u>アメリカ企業のソフトウェア開発依頼の割合が多い国は？その割合は？</u>	※インド人がアメリカ企業のトップに就任した背景には、アメリカのIT企業が多くインドに進出していることを伝える	■サンダー・ピチャイ氏の顔写真 ■資料集P. 51「アメリカ企業のソフトウェア開発依頼」
学習課題 <u>なぜアメリカの IT 企業はインドに多く開発依頼をするのか。</u>				
展開 35分	2 課題の追究	● <u>学習課題に対する予想をする</u> 【予想される意見】 ・数学・英語の教育水準が高い ・人口が多く、労働力・土地が安い ・アメリカとインドの昼と夜が反対だから ● <u>予想を検証する方法を考える</u> 【予想される意見】 ・学校の教育内容・学力テストの結果 ・平均賃金・土地の値段 ● <u>アメリカとインドの位置からインドとアメリカの企業の結びつきが強い理由を考える</u> 【予想される意見】 ・24時間対応が可能になるから	※グラフを提示し、アメリカの企業がソフトウェア開発を依頼するときに重視する項目を予想させる。 ※最初に時間をとって、自分の考えを書く時間をとる。 ◎4人1組のグループを作り、仮説を交流する時間をとる ◎難しい問題であることを伝える。	【評価】 ノートの内容、意見から、自分なりにインドの経済成長の理由について考えることができています。 (関・意・態)

		<p>●<u>教科書をもとにインドの経済成長に有利な点を整理する</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育水準が高い →言語が多いため、英語が共通の言語に →計算力が高い ・労働人口が多い →農業の近代化により労働力が都市へ ・インドにコールセンターを作ると、24時間対応が可能になる <p>●<u>インドの課題点・特色を整理する</u></p> <p>【課題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・都市問題(スラム、交通渋滞、環境汚染等) ・教育の格差、カースト制度 <p>【特色】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒンドゥー教、人口13億人、農業：ヒンドスタン平野 <p>●<u>有利な点と課題を総合して、働く国としてのインドを評価する。</u></p> <p>評価した後、その根拠についてペア・グループで話し合いペア・グループの意見を決める。</p>	<p>※生徒を指名して教科書を音読させ、音読を聞いている生徒は、自分の仮説に関係のある部分や課題に関係があると思われる部分に線を引く。</p> <p>◎インドについて点数とその根拠を考える。その後、グループで意見を交流する。</p>	<p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分なりに働く国としてのインドを、根拠をもって評価することができている。 (思・判・表) ・様々な意見を出し合い、それぞれの考えを認め合っている (自己肯定感)
<p>終 結 5 分</p>	<p>3 課題の解決</p>	<p>まとめ：アメリカのIT企業がインドに多く開発依頼をする理由を書く。</p> <p>例) 豊富な労働力と高い教育水準に加え、アメリカとインドは昼夜が逆になるという利点や、アメリカで働いた経験のある人々がインドのIT産業を成長させた経緯があるから。</p> <p>※二段目に本時の学習に対する自分なりの考えを書く</p>		<p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業に対する自分なりの考えや感想から、授業で得たものを自覚している。 (自己肯定感)